

2. ごめんね

各務原市立鵜沼第一小学校6年

津田 優子 石田 奈津季

5年

山田 果穂 広江 優衣 横山 わかな

↓

敦賀市立常宮小学校6年

古長 美蘭 刀根 成美

中村 翔也 森田 高志

私の名前は山田優子。

得意なことは絵をかくことで、ニガテなことは勉強なんだ。

私には親友がいるよ。

白鳥奈津季。

その子は絵も上手だし、勉強だってできるんだ。

私、その子と交換ノートをしているよ。

そこには絵や今日あった出来事とかが書いてあるし、私と奈津季は何でも相談できる親友だよ。

でも修学旅行が終わってその仲は……。

二学期のある日、三つ葉小学校六年三組に転校生がやってきた。

「四つ葉小学校から来た、吉田さりなです。一年間よろしくお願いします」

その子は背が高く、ポニーテールをしていた。

席は奈津季の前だった。

二十分休みの時、交換ノートを私と奈津季で書いていると、さりながやってきて、「おもしろそうね。私もやっていいかしら」

私はそんなに一緒にやりたくなかったけれど、奈津季が、「いいよ」と言ったので、三人でやることになった。

私と奈津季はピアノ塾に通っている。今日の放課後も行くことになった。

二人でピアノ塾のドアを開けると、すでに誰かが来ていた。

おかしいな。二人しか習っていないはずなのに……。

ゆっくりドアを開けると、そこにはさりながいた。

私は少しいやだったけど、仕方なく一緒にやることにした。

今、私が弾いているのはすごく難しい曲。分からないところがあったので、奈津季に聞いてみることにした。

「奈津季、教えて」

すると、さりながきょとんとした顔になった。

「ここでは、分からない人が分かる人に教えてもらうことになってるんだ」

先生の言葉にさりなは不思議そうだった。

こうして今日のピアノ塾が終わった。

次の日、奈津季から交換ノートをもらい、絵をかいていた。

ふと、さりなの文が気になり見てみると、そこには思いがけない言葉が書かれていた。

『ねえ奈津季、あんなくだらない塾やめて、もっと難しいところに行こ。私、紹介するから。』

優子は下手だから、奈津季だけでも。お願い、ね』

私の目から涙がこぼれた。

ずっと一緒にいた奈津季が私から離れちゃう。

どうしよう……。さりなに文句を言いたかったけど、ショックで言うことができなかつた。

私と奈津季の距離が離れていくかわりに、奈津季とさりなの距離が縮まっていくのを感じた。☆

次の日、奈津季がさりなに言った。

「わたしは、難しいピアノ塾に行けないよ。だって、優子を裏切れないし」

「ふうん。あっ、そう。明日から覚えてなさい。あなたも優子もひどい目にあわせてあげる」

この会話を聞いていたわたしは、改めて奈津季の優しさに気付いた。心の中で、
(奈津季ありがとう。ずっと友達だよ)

と、思った。

次の日の三時間目の体育の授業で、クラス対抗ドッチボール大会をした。

一試合目は一組と三組で戦った。

昨日のさりなの言葉が頭をよぎった。

私は、さりながいやがらせをしてくると思い、びくびくしていた。

しかし、試合中は何もおこらなかつた。だから安心していた。

試合は、負けてしまった。さりなが私に向かって話しかけてきた。

「あなたのせいで負けてしまったじゃないの。どこまでわたしたちの足を引っ張るの」

「そんな、優子のせいじゃないよ」

と、奈津季がめいっぱい言った。

「何よ。奈津季も足を引っ張ったじゃないの」

と、さりながいった。

「優子、もう行こう。こんなやつと話してたら、おかしくなるよ」

と、奈津季が言った。

「そうだね。あっち行こうか」

そうして私たちは、教室へと向かった。

四時間目が始まった。

私とさりな、奈津季とさりなの関係は、まだ良くなることはないと思っていた。
授業中、変な手紙が回ってきた。それは、さりなからだった。

『さっきは、ごめんね。言い過ぎた。』

なーんてうそ。さっきは、あなたたちが悪いのよ。

さりなより』

この手紙を読んで、私は腹がたってきた。

となりの奈津季に見せてあげた。

「ひどいね、さりなって」

と小声で言った。

ところが、手紙をわたすときに、先生に見つかってしまった。

先生がさげんだ。

「君たちを、放課後、居残りにします」

「いやだなー、さりなのせいだよ」

と、私はいやそうに言った。

「そうだよね」

と、奈津季が言った。先生が、

「やるぞ」

と、言った。私と奈津季が、いやそうに「は〜い」と返事をする、

「しゃきっとしろ！」

と、先生が怖い声で言った。

「はい！」

「さりなって、何で、あんなにひねくれているんだろうね」

「本当だね。あんなにひねくれている人、初めて見たよ」

「山田、白鳥、何しゃべっているんだ。集中しろ」

「はいっ」

「さっさとやって帰ろ」

と、奈津季が言った。

「そうだね。さっさとやろ」

と、優子が言った。

「はぁ〜、やっと終わった」

「ほんと疲れたね」

と、二人でだるそうに言った。

「まじめにやると、早く終わるだろ」

と、先生がうれしそうに言った。

「早く家に帰ろう」

と、奈津季が言った。

次の日、私と奈津季が学校に着いて「おはよう」とそろって言うと、いつもみんな「おはよう」と言ってくれるのに、今日は、だれ一人も言ってくれる人がいなかった。

私と奈津季は、(みんなどうしたのかな。元気ないな) と思いながら、自分の席に座った。

そして、次の日も次の日も、「おはよう」と言ってくれる人はいなかった。

すごく気になり、仲のよい与作君に、今、何が起きているか聞いてみたら、

「さりなが、優子と奈津季をシカトしよって、言ってたよ」

と教えてくれた。

奈津季と私は、おどろいてしまった。

「さりながそんな悪いことをするなんて思わなかったよ。でも、これからどうしよう」

「与作君は仲よくしてくれるみたいだけど……」

それから、わたしたちは与作君のところへ行った。

「ありがとう。与作君」

と、私と奈津季が言った。

「さりなが考えなおしてくれるといいんだけど……」

与作君が言った。

次の日、さりながわたしたちの席に向かって来た。

「ごめんね。昨日の夜に反省したの。友だちが減って、さみしくなっちゃって……。で……。ゆるしてください」

と、さりなは、わたしたちの目を見つめて言った。

奈津季とわたしは、今までいやがらせを受けていたのに、すぐにさりなをゆるしてしまった。

「本当にいいの？ ありがとう」

と、さりなが言った。